

原著論文

大学における地域看護学の授業展開 ー健康教育の演習を中心にー

野原真理, 照沼美代子, 村山正子

つくば国際大学医療保健学部看護学科

【要 旨】保健師の保健指導技術として位置づけている集団への支援の中で、演習を取り入れて行っている健康教育の授業方法について、本授業のプロセスと学生の学びから評価し、授業改善に役立てることを目的とした。大学3年生54名を対象として、授業終了後に『健康教育の一連の流れを実施して』の課題レポートの提出を求めた。記述されたデータは逐語録としてデータ化した後、内容分析を用いて分析を行った。分析の結果、【対象把握】【目的・目標の設定】【テーマの設定】【指導案・学習内容】【教育媒体】【プレゼンテーション】【評価】【グループワーク】の8つのカテゴリに集約された。【グループワーク】を除いてどのカテゴリにおいても「対象者に合わせる」というサブカテゴリが抽出された。学生が学んだ内容は、教員が伝えたい健康教育の援助技術を網羅しており、演習をとおしてのグループ指導がその理解につながったことが示唆された。(医療保健学研究 第1号 : 88-101頁)

キーワード : 地域看護 ; 看護大学 ; 授業方法 ; 健康教育

序 論

4年制大学における看護基礎教育は、保健師助産師看護師学校養成所指定規則による専門的な知識・技術の教育に留まらず、批判的思考力や創造性の涵養、研究能力の育成をも目指しており、医学、心理学、社会学、哲学等の学際的な知識を基盤とする「看護学」の学問領域として位置づけられている。一方、社会の変化に伴い大学全入時代が到来したと言われており、

学力に幅のある学生が入学してくる中で、学士課程において学生が身につけるべき学習成果を明確化していくことが求められている。このことは看護系大学においても同様であり、本学においても切実な課題となりつつある。

現行の4年制大学における保健師教育は、看護師・保健師統合カリキュラムとなっており、少ない単位数の中で教授内容を精選し、教授方法についてもそれぞれの大学がそれぞれの方法で授業を展開している現状にある。大学教育に移行する以前の保健師教育は、看護師免許を持ち保健師を志す学生を対象として1年課程で実施されていたが、統合カリキュラムでは4年間の中で、保健師教育科目を学生全員が履修する必修科目として位置づけられている。そのため、学生の中には保健師への志望もあまりな

連絡責任者 : 野原真理

〒300-0051 茨城県土浦市真鍋6-8-33

つくば国際大学医療保健学部看護学科

TEL: 029-826-6622

FAX: 029-826-6776

e-mail: m-nohara@tihs-hs.jp

く学習へのモチベーションが低い者も見受けられる現状である。さらに、教科のメインとなる「地域看護学」、つまり地域を基盤とした看護活動は、他の看護領域と比較して学生にとってイメージし難いと言われており(錦織, 2000; 大野, 2001)、その内容をいかに具体的に教授できるかは、教員にとって大きな課題である。

本学は開学 3 年目で、昨年度から保健師教育のカリキュラムの一部を開始した。本学のカリキュラムは 2 年次後期から 3 年次前期にかけて導入となる地域看護学概論、地域看護活動概論と、それに続く各論の 3 科目が教授され、4 年次後期の地域看護学実習で統合する形をとっている。各論では、保健師の技術を主な柱としており、「地域看護活動論Ⅰ」では地域診断を、「地域看護活動論Ⅱ」では個別的支援を、「地域看護活動論Ⅲ」では集団・組織的支援を取り挙げ、その授業方法として演習をとり入れたグループワークで行っている。

「地域看護活動論Ⅰ」で取り上げる地域診断は、人々の健康に関わる情報を分析し、問題とその背景を明らかにしていくプロセスである。人々の健康は、環境、政策、経済、社会情勢、価値観など地域を取り巻くさまざまな条件と深く結びついており、これらの関連を踏まえ、個人の健康ニーズ、地域の健康課題を明確にし、計画策定、実施・評価していくことが地域看護活動の展開の基本となる。地域診断の方法論としては、問題解決型手法や地域づくり型手法(岩永, 2003)、民族誌学的方法(金川と斎藤, 1998)、ヘルスプロモーションの具現化モデルであるプリシード・プロシード(PRECEDE-PROCEED)理論の活用(六鹿と中村, 2005)などがあるが、これらもまだ確立されたものではない。一方、現在、主な保健師基礎教育のテキストでは、地域診断の基礎理論として「コミュニティー・アズ・パートナー(Community as Partner)」が紹介されている(大須賀 他, 2002; 標, 2008; 平野, 2005)。その理由としては、コミュニティーを保健師活動の対象としてではなくパートナーとして捉えていること

(アンダーソンとマクファーレン, 2002)を支持して採用されたものと考えられる。本学においても、この理論を使用したモデルを授業に取り入れている。「地域看護活動論Ⅱ」で取り上げる個別支援では、保健指導の基本となる健康相談、家庭訪問の演習を取り入れている。さらに「地域看護活動論Ⅲ」では、「地域看護活動論Ⅰ」での地域診断との結びつきを強調した授業展開をし、その上でグループによる健康教育の演習を取り入れた。

開学 3 年目にあたり FD(Faculty Development)への関心が高まっている状況において、今回は各論に焦点を絞り、3 科目の授業概要を示した上でその中の地域看護活動論Ⅲの健康教育の授業方法について、本授業のプロセスと学生の学びから評価し、授業改善を目的に検討した。

方 法

対象者

4 年制大学で看護師・保健師統合カリキュラムを学ぶ 3 年生 54 名(女性 42 名、男性 12 名)を対象とした。

研究方法および分析方法

授業方法を評価する対象としては、①授業プロセス、②授業終了後に提出を求めた『健康教育の一連の流れを実施してわかったこと、自己の振り返りと今後の課題について』のレポートとした。②の分析については、南風原ら(2007)の文献を参考にしてデータの読みと概念化を実施しコード化した上で、概念間の構造的・過程的關係を抽出し、統合・再構成する作業を繰り返す中で概略を描き、①との関連で考察した。分析にあたっては、地域看護学領域の研究者 3 名で討議を繰り返し、信頼性と妥当性を高めるように努めた。

研究期間は、平成 21 年 4 月～11 月である。

地域看護活動論Ⅲの演習について

倫理的配慮

対象者に、調査の主旨および内容、研究への参加の有無が成績評価には影響しないことを口頭および書面にて説明し、守秘義務について保証したうえで同意書の提出を得た。

結 果

各論 3 科目の授業概要

「地域看護活動論Ⅰ」「地域看護活動論Ⅱ」「地域看護活動論Ⅲ」の授業概要は表 1 のとおりである。授業の中では、地域看護活動においては、健康課題に向けて個別的支援と集団・組織的支援はケースの状況に応じて様々な方法で継続的に行われることを繰り返し強調した。

1) 目的

2 年次に学習した地域診断から抽出した健康課題と関連させて、健康教育の計画・実施・評価のプロセスを実施することにより集団に対する保健指導技術の基本を習得する。

2) 目標

- (1) 受持地域の地域診断から抽出した健康課題と関連させて、健康教育のテーマを考えることができる。
- (2) 対象者を設定し、対象者に合った学習方法や学習内容を考えることができる。
- (3) 科学的根拠のある正確な学習内容を提示できる。
- (4) 単位時間を考慮して健康教育の目的・目標が設定できる。

表 1. 各論 3 科目の授業概要.

科目名	開講時期	単位・ 時間数	授業形態および主な授業内容		評価方法
			講義	演習	
地域看護活動論Ⅰ	2年後期	2単位 30時間	・地域診断とは ・地域診断に活用できる理論・モデル ・ヘルスニーズとの関連性 ・地域看護活動の展開 ・活動計画の立案 ・予算化、実施と評価 ・保健所施策と保健計画	・行政資料や統計資料の分析 ・地域踏査計画の立案 ・某地区の地域踏査、地域調査の実施 ・健康課題の抽出 ・プレゼンテーション	態度30% レポート20% 試験50%
地域看護活動論Ⅱ	3年前期	2単位 30時間	・保健指導とは ・保健行動、健康教育に活用できる理論・モデル ・健康相談の支援技術 ・健康診査時の保健指導 ・家庭訪問の目的と方法 ・家庭訪問計画の立案	・カウンセリングの基本 ・面接技術の基本 ・成人事例を用いた健康相談 ・乳児健診での保健指導 ・新生児訪問指導	態度30% レポート20% 試験50%
地域看護活動論Ⅲ	3年前期	2単位 30時間	・健康教育とは ・学習と教育 ・教育媒体 ・健康教育の展開方法 ・地域組織活動の基本 ・セルフヘルプグループへの支援 ・地域組織活動の展開	・健康教育の企画 ・指導案の立案 ・媒体作成 ・プレゼンテーション ・評価	態度30% レポート20% 試験50%

表 2. 演習のすすめ方.

	月日	学 習 内 容・到 達 目 標
演習(1)	6月3日	健康教育の対象を選定し、テーマを考え、教育の企画立案を行う 対象者観、指導者観をもつ
演習(2)	6月10日	指導案を作成する① 対象者の理解、目的・目標、場の設定、指導内容の検討を行う
演習(3)	6月17日	指導案を作成する② 発表原稿、教育媒体、評価方法の検討を行う
演習(4)	6月24日	教育媒体を使用しながら、デモンストレーションを行う 発表準備を行う
演習(5)	7月1日	プレゼンテーションを行い、学生同士評価を行う。
演習(6)		会の運営を行う。教員も講評する。
演習(7)	7月8日	他己評価を交えてグループの自己評価を行う 教員からのフィードバックを行う。

表 3. 健康教育の評価項目.

項 目	内 容
指 導 案	テーマの選び方 学習者が興味関心をもつテーマだったか 学習者の実態に合ったテーマだったか
	目標の設定 学習者が本時間内で達成可能な目標だったか 評価可能な目標の設定だったか
	構成 時間の配分は適切だったか 効果的な導入・展開・まとめはできていたか
	内容 テーマと内容は合っていたか 学習者のレベルにあった内容だったか 学習者が身近に考えられる内容だったか 学習者の生活背景を考慮した内容だったか
	学習方法と場の設定 学習形態は適切だったか 会場設営は今回の健康教育の運営に合っていたか 照明やマイクなどの調整は適切だったか
実 施	学習者 目標は達成されたか 参加態度や発言から学習意欲は感じられたか 質問するなど積極的な姿勢は見られたか 参加者同士の協調性は見られたか
	指導者 分かりやすい言葉遣いだったか はっきりと聞こえる声の大きさだったか 話す速さや、間の取り方は適切だったか 学習者の反応を把握できていたか 学習者の主体的な参加を促す働きかけができていたか

- (5) 対象者に合わせた発表原稿・教育媒体・評価方法を考え作成することができる。
- (6) 学習方法や対象者に合わせた会場設営ができる。
- (7) 対象者の反応を見ながらプレゼンテー

ションができる。

- (8) 健康教育の評価ができる。
- (9) 健康教育の一連のプロセスをグループで協力して行うことができる。
- (10) 健康教育発表会の運営ができる。

3) 進め方

- (1) グループ編成：1 グループ 6～7 人で 8 グループとした。
- (2) 対象者の設定：1 グループ 1 対象(母子、学童、成人、高齢者)とし、グループの希望により学生間で調整し決定した。
- (3) 場の設定：学生が選定した。
- (4) 時間の設定：発表時間は 15 分とした。
- (5) 教育媒体：模造紙、画用紙を使用することとした。
- (6) 演習の学習計画：表 2 の演習のすすめ方のとおり。シラバス作成当初は 5 回の演習予定であったが、授業進行中の 6 月に、4 年次に行う地域看護学実習の打ち合わせを実習施設と行った際に、当初見学実習を予定していた健康教育が実習施設からの要望で変更になり、学生が住民に対して責任をもって実施することになった。そのため学生一人ひとりが健康教育の指導案を立案し実施・評価できることが必須となり、本科目の到達目標の変更を行った。この件に関して学生に説明した上で演習時間を 2 回増やして 7 回とした。また学生のグループワークは授業時間内だけでは時間が不足し、教員も細やかな指導を行うには限界があったため、毎回授業時間外のグループ指導を行い自己学習への動機づけや次の演習に臨めるように支援した。
- (7) 評価：まず①他己評価(一人が他のグループを 1 つ受け持ちグループ代表として評価する。つまりグループは 7 枚の他己評価を受取る)を実施し、次に①も参考にしながら②自分達のグループ評価を行った。評価項目は表 3 のとおりで自由記載とした。

講義・演習をとおして

学生は設定した対象について、地域診断から

健康教育のテーマを決定し、学習内容を考えるというプロセスを踏むことが出来た。グループの健康教育のテーマ等は、表 4 に示した。

健康教育演習をとおして学生が学んだ内容について

対象者 54 名のレポートから抽出された内容についてカテゴリ化を進めた結果、学生が学んだ内容は、健康教育の援助技術から成る【対象把握】【目的・目標の設定】【テーマの設定】【指導案・学習内容】【教育媒体】【プレゼンテーション】【評価】の 7 つと、授業方法として採用した演習の進め方に関連する【グループワーク】を加えた 8 つのカテゴリに集約された。健康教育の援助技術に関連した 7 項目について、演習の目標との対応と各カテゴリを構成するサブカテゴリ(〔 〕で示す)を表 5 に示した。以下にカテゴリ別に学生の記述(「 」で示す)を述べる。

1) 【対象把握】では、〔健康課題の抽出〕〔日常生活の理解〕の 2 つのサブカテゴリから構成された。

〔健康課題の抽出〕では「対象者の健康課題の抽出に手間どった」「多くの文献に目をとおり小学 3 年生はどのような存在なのか学んだ」「高齢者の身体変化を学習し直した」、〔日常生活の理解〕では「中学生は部活や塾通いで規則正しい生活が出来にくくなっているなど実態を把握した」「きちんと対象を理解する必要がもっとあった」という記述がみられた。

2) 【目的・目標の設定】では、〔目的・目標の意味〕〔対象者に合わせる〕の 2 つのサブカテゴリから構成された。

〔目的・目標の意味〕では「目的・目標がしっかり考えることができれば健康教育は行うことができることがわかった」「最も伝えたいことに焦点を当て、目標を絞る必要があった」「目標の設定が十分でなかったために、内容が濃すぎたり、展開の順序立てがうまくいかなかったと感じた」、〔対象者に合わせる〕では、「目

表 4. 学生が設定した対象者および健康教育テーマ一覧.

G	地域診断との関連 根拠となる情報	対象設定	テーマ	学習内容
1	中学区の生産年齢 人口割合、 産業別人口割合 飲酒の実態	【壮年期男性】 事業所の定期健診で 肝機能データ高値者 に通知のうち希望者	肝臓をいたわろう ～体によいお酒の飲み方～	肝臓の働き 検査データを理解しよう 肝臓と飲酒の関係 適正飲酒と方法
2	〇〇市の小中学生 の食生活の実態 国民栄養調査 朝食欠食の習慣が つく時期	【思春期】 中学2年生 男女30名	「Let's目覚まし朝ごはん」	朝食が大切な理由 一日に必要なエネルギー量 朝食を自分で作って みよう
3	老年人口割合 介護保険関連資料 高齢者の健康問題	【高齢者】 65歳以上自立度の 高い男女20名	転ばないための脚づくり ～楽しく音楽運動～	加齢に伴う身体変化 なぜ運動が必要か 転倒を予防するための運動 脚の筋力をアップする運動 留意点
4	年少人口割合 小学生の人数 小学生の放課後の 過ごし方	【学童】 小学3年生 1クラス男女30名	『目を大切にしよう!!』 ～どうして目が悪くなるの～	テレビやゲームと視力低下 目のつくりとしくみ 物が見えるしくみ 近視って？ 視力低下を予防するには
5	〇〇市の25～39歳 人口 健診結果	【青年期】 大学生の男女 48名	食事のバランスを知らない メ〇ボになるぞ！ ～今から始めよう早期予防～	メタボリックシンドロームとは 大学生になってからの体型の 変化 必要な摂取エネルギー 事例から食生活の改善を考える
6	老年人口割合 介護保険関連資料 認知症高齢者の数 や実態 家族の悩み	【高齢者】 公募の呼びかけで 集まった60歳前後 の男女30名	「誰でもなりうる認知症」 ～早期発見！予防のため！ ！！～	認知症とは 認知症の初期症状 認知症の相談窓口 認知症の予防①生活習慣病 予防②前頭葉の活性化
7	中学区の生産年齢 人口割合 出生率	【母子】 妊娠中期の 初産婦とその パートナー	安全・安楽に出産に臨む ために 『ぽかぽか体操』	妊婦の身体の変化 運動の必要性 妊婦体操の紹介 妊婦体操の注意点と禁忌
8	出生率 0歳児人口 育児不安	【母子】 乳児を持つ母親 (4か月児健診の 来所者)	レスキューmy baby ～わが子を誤飲・窒息から 守る～	児の発達と事故との関連性 誤飲と窒息 乳児が飲み込んでしまう大きさ 誤飲と窒息は予防できる 家の中を点検しよう

的・目標を対象者に合わせる」という記述がみられた。

3) 【テーマの設定】では、【地域診断との関わり】【テーマの具体化】【テーマの表現方法】【対象者の立場で考える】の4つのサブカテゴリから構成された。

【地域診断との関わり】では「最初は地域性を全く考慮せず、ただ授業で勉強したことを当てはめただけだった」「地域の問題発見が重要」「地域の特性や対象者の理解がとても大切」、【テーマの具体化】では「どんな課題で教育を行うかにも時間がかかった」「すぐにできるような目標の設定をする方がよい」という記述が

見られた。【対象者の立場で考える】では「家庭内にある身近な物が乳児の生命の危険に深く関係していることを両親に関心をもってもらいたかった」「対象者の生活に身近な問題に関連し興味関心を持つことを考えた」「日常生活に取り入れられることを大切にして、受容してもらえるような健康教育をすることを目指した」、【テーマの表現方法】では、「タイトルとサブタイトルを上手く使って、対象者がいかにテーマに関心を持ってくれるか、インパクトのあるものを考えた」という記述があった。

表 5. 健康教育の授業目標と学生の学び.

授業目標	カテゴリ	サブカテゴリ
目標1	対象把握	健康課題の抽出 日常生活の理解
目標4	目的・目標の設定	目的・目標の意味 対象者に合わせる
目標1	テーマの設定	地域診断との関わり テーマの具体化 対象者の立場で考える テーマの表現方法
目標2 目標3 目標4	指導案・学習内容	「指導案」の理解 教育方法の工夫 根拠のある教育内容 具体性のある内容 焦点化の必要性 予防の視点 対象者の立場で考える わかりやすい表現方法
目標5	教育媒体	対象者に合わせる 作成技術
目標6 目標7	プレゼンテーション	技術 ことば遣い 態度 正確に伝える 反応をみる 参加を促す 対象者に合わせる 想定質問への準備
目標8	評価	肯定的評価・希望・展望 自己の学習態度への反省・課題 対象者に合わせた評価方法 困難性 自身の行動変容

4) 【指導案・学習内容】では、[「指導案」の理解][教育方法の工夫][根拠のある教育内容][具体性のある内容][焦点化の必要性][予防の視点][対象者の立場で考える][わかりやすい表現方法]の8つのサブカテゴリから構成された。

【「指導案」の理解】では「指導内容をきちんと書くことが大切」「対象者に合ったテーマを設定し、主体的に参加できる環境を整え習得しやすいように工夫した指導案が重要」、【教育方法の工夫】では「自分が伝えたいことを正確に理解し、媒体を使用して対象者が理解できるように工夫する必要があると思った」、【根拠の

ある内容】では「資料を用いて的確な教育を行うということを学びとった」「根拠が不十分で度々書き直した」、【具体性のある内容】では「具体化することに苦戦した」「具体性が欠けていた」「対象者に何を伝えたいのか、どこまでを目標にするかを検討したら内容が深まっていた」「普段テレビを見ている位置までの距離を測ったことで(対象者が)自分のテレビの見方を振り返るきっかけが作れた」、【焦点化の必要性】では「もっと重要なところを絞って説明しなければならなかった」「肝心な部分の内容が薄く、飛躍してしまっていた」「自分たちが一番何を伝えたいのかに何度も戻った」、

【予防の視点】では「高齢者は転倒予防のために下肢の筋力を鍛える必要がある」、【対象者の立場で考える】では「指導内容を考える時に学習者の立場になって考えることが大切、内容のわかりやすさや、参加しやすい環境づくりを配慮した」、【わかりやすい表現方法】では「専門用語を並べても伝わらなく、それを砕いていく作業が大変だった」「どう表現したら聞き手が日常生活に取りいれようと思ってくれるか試行錯誤した」等の記述があった。

5) 【教育媒体】では、【対象者に合わせる】【作成技術】の2つのサブカテゴリから構成された。

【対象者に合わせる】では「対象者の能力や学習段階を知らなければならない」「家の中の危険な場所の図は母親にも想像しやすかったと思う」「チャイルドマウスは実際に母親に手にとってもらい体験してもらおうとよかった」、【作成技術】では「媒体を見れば言いたい内容がわかるようにすること」「文字の大きさや色の使い方は工夫する必要がある」等の記述があった。

6) 【プレゼンテーション】では、【技術】【ことば遣い】【態度】【正確に伝える】【反応をみる】【参加を促す】【対象者に合わせる】【想定質問への準備】の8つのサブカテゴリから構成された。

【技術】では「人に教えることの難しさを感じた」「説明が不足していてわかりにくかった」「資料の使い方や説明のしかたはもっと工夫が必要だ」「対象者に対して行動変容を促そうと強要しない」「歌いながら運動をすると呼吸を止めずに運動することができていた」「発表の中で他のグループの学習内容や考察を知ることや、教員のアドバイスを受けることにより、不足している内容や新たな視点を得た」、【ことば遣い】では「聞き手のことを考えず時間内に終わらせようと、話すスピードやボリュームを気にしていなかった」「声の大きさや視線・表情に気をつけてゆっくりと大きな声で話す」「指導者の言葉の曖昧さは学習者の理解の妨

げになってしまう」「対象者の自尊心を傷つけないような言葉遣い、あいさつ、態度などが大切だ」、【態度】では「自己紹介を含め挨拶をすることの大切さを知った」「緊張して声が小さくなってしまったり、対象者と目を合わせることができなかった」「自分の立ち位置が大切」「堂々とした態度で臨むのが望ましいと思った」「台詞を暗記していたがたくさんの人の前に立ったら忘れてしまった」、【正確に伝える】では「自分の伝えたいことを相手に正確に伝えるのは難しいことだった」、【反応をみる】では「理解しているかを対象者の反応からみる必要がある」「話し手が一方的に話し展開していくのではなく、雰囲気や対象者の表情、反応がとても大切なのだと感じた」「自分のことで精一杯になってしまい対象者に気をまわすことができなかった」、【参加を促す】では「発問の仕方など改善が必要だと思う」「自らもその健康教育に関心を持たなければ対象者の方達は興味関心をもってくれないと考えた」「積極的に声をかけて対象者にとって親しみやすい存在になれるようにするとよかった」、【対象者に合わせる】では「小学3年生に対する言葉遣い」「対象者にわかるように説明する」、【想定質問への準備】では「想定される質問を予測して回答を準備しておく必要があった」「想定外の質問が多くその場で答えられなかった」等の記述がみられた。

7) 【評価】では、【肯定的評価・希望・展望】【自己の学習態度への反省・課題】【対象に合わせた評価方法】【困難性】【自身の行動変容】の5つのサブカテゴリから構成された。

【肯定的評価・希望・展望】では「参加型の健康教育を実施してみたいと強く思った」「達成感があった」「今回の健康教育は達成感と充実感をとても感じる体験だった」「自分の気づかない点に気づかせてくれた」「皆で協力できたことがとても楽しかった」、【自己の学習態度への反省・課題】では「自信をもつために裏付けをしっかりと学ぶことが私にとって課題だ」「まず自分が理解していなければ相手には伝

わらない」「豊富な知識がなければ援助はできない」「『生活』につなげるにはたくさんの知識が必要だ」「知識を自分のモノにしていなかった」「指導にはコミュニケーション能力が必要だ」「知識不足を感じた」「日頃から言葉遣いに気をつけなければと思った」、【対象に合わせた評価方法】では「評価方法も対象に合ったものを選ばなくてはならない」「拍手をしてもらうことで評価することにした」「評価方法が不十分だった」、【困難性】では「自己満足していた部分が多かった」「納得のいく答えが伝えられなくて悔いが残った」「自分自身がメタボリックシンドロームについて理解することが大変だった」「わかったことは自分達の想像通りには展開されないことだった」「最初は『授業で勉強したから簡単だろう』と思っていた」、【自身の行動変容】では「私自身が朝食を食べるようになった」があった。

8) 【グループワーク】では、【肯定的(協力・学べた)】【反省・困難性】【楽しい】【自分の役割】【保健師のしごとの理解】の5つのサブカテゴリから構成された。

【肯定的(協力・学べた)】では「グループ間で一体感ややりきった感がありとても貴重な体験だった」「メンバー全員が意見を出し合い仲間と協力する大切さを実感した」「真剣にかつ積極的に取り組んで雰囲気がとてもよかった」「グループ内でいろいろ考えた」「チームワークが本当に大切だ」「発表に間に合うよう団結して取り組めた」「時間をいかに上手く使っていくか学んだ」「自分の頭の中では考えられないような柔軟なアイデアが提案された」

「先生にアドバイスをもらってから焦点を絞り対象者のことを念頭に置きながら話し合った」、【反省・困難性】では「グループ皆で話し合いをまとめることができなかった」「班長だったがいまいち指示がうまくできず」「最初グループワークなんて何のメリットがあるのかと疑問をもった」「メンバーへの甘えから積極的に参加しなかった」、【楽しい】では「放課後残って指導案や媒体を作成するのは楽しかった」

「資料や文献を調べている時は楽しかった」「楽しく実施することができた」、【自分の役割】では「グループの中でサポート的役割だった」「グループの潤滑油の役割だった」【保健師のしごとの理解】では「グループワークを通して健康教育も保健師の仕事の中ですごく重要だということが理解できた」という記述が見られた。

考 察

健康教育の授業からの学生の学びについて

学生のレポートの分析から、対象把握から評価まで健康教育のプロセスについて全てカテゴリとして抽出されており、講義とグループ学習による演習から学生全体としてある程度の理解につながったことが示唆された。岩永と中山(2009)は、指導案を作成し模擬演習(発表)を行った後のアンケートでは「自分で指導案の作成ができる」について約7割の学生が「なんとかできる」と回答していたと述べている。本研究においても、演習をとおしての実体験が学習内容の理解と自信につながったと解釈できる。

地域看護における保健師の機能の1つに住民自身が健康づくりに取り組み、健康的な生活が実践できるよう住民の主體的な学習を支援する役割がある。この活動の一環として住民の健康増進や健康問題の解決のために行うのが健康教育である。保健師に求められる健康教育の特徴は、日常の地域看護活動で得られた多くの情報や知識に基づいて、その地域に適した内容を構築し対象者の生活に根ざした支援が継続的に提供できる点と言われている(中村と渡部, 2009)。今回の演習では、「地域に適した内容」を大学2年次に実施した「地域診断演習」からつなげようとした試みであった。教員はグループ単位に、2年次に実施した地域診断演習の学習内容を想起させ、地域特性や抽出した健康課題と関連づけて考えたらどうか等の投げ

かけを行った。その結果、学生は「最初は地域性を全く考慮せず、ただ授業で勉強したことを当てはめただけだった」のが、授業終了後には「地域の問題発見が重要」「地域の特性や対象者の理解がとても大切」に変化してきており、このことから地域における健康教育の意義を捉えることができたと考えられる。

また学生は、これまで疾患をもった個人を中心とした看護過程を実施してきたが、今回はじめて集団としての地域を対象とした地域診断から健康教育までの学習をした。学生の学びの記述から、今回の講義と演習をとおして、2年次に既習の地域診断の重要性とともに健康教育課題抽出の困難さを体験することで、日常の保健活動で住民の生活実態を捉えることや、住民の意見を聞く意義を改めて理解することができたと考える。さらに【グループワーク】を除いてどのカテゴリにおいても【対象者に合わせる】というサブカテゴリが抽出された。このことは学生が健康教育を企画・実施する際に常に対象者に目をむけて対象者を主体として考えていたことを示すと考えられる。堀川ら(2003)の研究では、講義と実習をとおして最も多かった気づきの記述は、健康教育実施場面における言葉の表現方法や媒体の工夫など教育方法の技術に関するものが約4割、次いで対象者の理解が1割であったと述べているが、本研究の対象者は授業終了時の段階では健康教育のどのプロセスも重要と認知されていることが考えられる。健康教育における保健師の役割は、地域の住民の主体的な健康に関する学習を支援することに重点が置かれている。学生達が演習をとおして具体的に住民と支援者の関係性について体験的に学ぶことができたと考えられる。

演習での教員のグループ指導について

今回、7回の演習と授業時間以外のグループ指導を行ったことは、グループとして、また学生ひとり一人の健康教育の理解につながった

と考えられる。教員の指導内容では特に対象把握、目的・目標の設定、テーマの設定には多くの時間を要した。演習開始時は、他教科で学習している内容を安易にテーマに選び、対象者との関連性も考慮せず、指導案は知識を羅列するのみということも見られたが、指導を重ねていくうちに、どのグループも対象者にとって必要な学習内容は何なのかを考えて悩み、自分達はある対象者に何を伝えたいのかを考えて立ち止まり、時に進めなくなることもあった。どのグループもじっくりと時間をかけて取り組んだ演習であったと考える。学生が学んだ内容は全体として、表5に示したとおり健康教育演習の目標と対応しており、教員が伝えたい健康教育のプロセスや、地域診断から繋がるテーマの設定、対象者に合わせた指導案の立て方、プレゼンテーションの技術といった健康教育の援助技術をほぼ網羅していると考えられる。

また、演習でのグループ学習の内容に加えて、発表会で他のグループの指導案に目を通し、プレゼンテーションや教員のアドバイスを聞くことにより、不足している内容や新たな視点を得たという記述もあり、発表会での学びも多かったことが示唆される。

学生のとりくみとして講義と並行する演習初期の段階では、学習内容の理解度も自己学習のとりくみも不十分であったため、90分の演習の中でその単元の課題をこなすことが困難な状況にあったと考えられる。またグループワークに習熟しておらず、演習時間内でメンバー同士の十分な討議をもつことが困難であったことも考えられる。その結果、課題の積み残しが多くなり、授業時間以外のグループ指導の必要性が出てきた。しかし教員のグループ指導により演習が具体的かつ実践的に進むに従って、学習内容の理解度も格段に上がっていったことが示唆される。加えて、実習で実践することを伝えたことも学生が主体的に学習に取り組む契機になったと考えられる。今後の対応策としては、グループワークのすすめ方、特にグループワークでの時間管理について学生のレデ

ィネスも考慮して指導を強化していくと共に、教員の介入方法についても検討する必要があると考える。

今回の研究では、学生個人の学習内容や、健康教育全てのプロセスにおける到達度については分析することができなかった。今後の課題である。モチベーションの異なる学生に、等しく学習課題を達成させるための教員の意図的な教育方略が求められると考えるが、現行の中ではグループ指導を増やすことで対応するしかない現状である。このことについては学生に説明し授業内容や到達レベルについて理解を得ていくことが必要と考えている。なお、大学における保健師教育の時間数不足については、現在①選択制で行う、②専攻科で行う、③大学院教育で行う等コース選定を含めて、全国の看護系大学で検討されているところである。

まとめ

健康教育(地域看護活動論Ⅲ)の授業方法を改善するために、授業のプロセスと学生の学びのレポートを分析し、以下のことが明らかになった。

1. 健康教育の授業の理解を深めるために、講義と演習(グループ学習)は有効であった。
2. 学生は、健康教育の計画立案、実施、評価に主体的に取り組むことによって、学習に対する意欲を高めることができた。
3. 学生個人の学習到達度を高めるためには、グループ指導を増やすことが有効であった。
4. 健康教育の演習時間を増やし、授業時間内に指導ができる体制にしていけることが今後の課題となる。

謝 辞

本研究にご協力いただきました学生の皆様に深く感謝いたします。

参考文献

- 岩永俊博 (2003) 地域づくり型保健活動の考え方と進め方. 医学書院, 東京.
- 岩永牟得, 中山弘子 (2009) 健康教育をテーマとした地域看護学演習. 帝京平成大学紀要. 20: 81-93.
- エリザベス・T・アンダーソン, ジュディス・マクファーレン編集 (2002) コミュニティー・アズ・パートナー～地域看護学の理論と実際～. 医学書院, 東京. pp131-167.
- 大須賀恵子, 白石知子, 古田加代子 (2002) 踏査を導入した地区診断の学習成果と今度の課題. 保健婦雑誌. 58: 506-511.
- 大野絢子 (2001) 「地域診断の基礎教育」の現状の課題—時代の流れを追って. 保健婦雑誌. 57: 610-616.
- 金川克子, 斉藤恵美子 (1998) 民族誌学的手法を取り入れた地域看護診断法—事例展開によるその実際. 生活教育. 42: 24-31.
- 標美奈子 (2008) 地域看護活動の展開における地域診断. 奥山則子 他著. 標準保健師講座 1 地域看護学概論. 医学書院, 東京. pp104-109.
- 中村裕美子, 渡部月子 (2009) 健康教育の展開. 中村裕美子 他著. 標準保健師講座 2 地域看護技術. 医学書院, 東京. pp138-172.
- 錦織正子 (2000) 地域看護教育における実習計画と指導—地域診断(地域把握). 保健婦雑誌. 56: 286-292.
- 南風原朝一和, 市川伸一, 下山晴彦 (2007) 心理学研究. 日本放送出版協会, 東京. pp47-57.
- 平野かよ子 (2005) 第 1 章. 平野かよ子 編. 最新保健学講座 1 地域看護学総論②～

- 地域診断と保健福祉施策～, メヂカルフレンド社, 13-15.
- 堀川淳子, 真島由貴恵 石原逸子 (2003) 「健康教育」の実施能力を育成する教育方法の課題 ―産業看護実習における集団健康教育実施後の学生の意識と気づきの分析より―. 産業医科大学雑誌. 25: 341-349.
- 六鹿裕子, 中村譲治 (2005) 看護専門学校教育における PRECEDE-PROCEED モデルの応用事例. 公衆衛生. 69: 237-242.

Original article

Class progressing of public health nursing at university: From viewpoint of health education by practice

Mari Nohara, Miyoko Terunuma, Masako Murayama

Department of Nursing, Faculty of Health Science,
Tsukuba International University

Abstract

The purpose of this study is to evaluate the class method of the health education using practice for the health guidance technology of the public health throughout the process of this class and a learning of students, and to improve this class with such a class method. A report of “About what you understood by experiencing a series of flows of health education.” was submitted by the juniors of 54 undergraduate nursing students following the completion of all courses of Public Health class. The described words and phrases in the report were recorded as word for word, and analyzed. The results were divided into eight categories: 【Understanding of the Object Person】; 【Purpose and Target】; 【Setting of the Theme】; 【A Teaching Plan and Learning Contents】; 【Educational Medium】; 【Presentation】; 【Evaluation】; and 【Group Works】. In all categories except for 【Group Works】, [Adapting to the Object] was extracted as the subcategory. The contents that the students had learned covered all of the public health nurses’ assistive technology which the professors should lecture. The group guidance through the practice may facilitate the understanding of those contents of the students. (Med Health Sci Res TIU 1: 88-101)

Keywords: Public Health Nursing; University of Nursing; Teaching materials; Health education